

會



報

1953年9月

169

日本山岳會

島本恵也著

山岳文學序説 を讀んで

藤木九三

この書が手許に贈られたのは、曾てわたしが文學青年として机をならべ親しく恩顧を蒙つた現藝術院會員河井醉若さんからだつた。著者は氏の令息で、東大國文科を専攻した前途有爲の學徒だつたが、本書の稿本が成るとともに三十歳の若さでこの世を去り、順逆相違して醉若さんが遺稿を整理されたという後書が、先ずわたしの心を打つた。すると筆者はおそらく幼い時の著者と面識があつた氣もするが、「山」を縁としながら遂に親しく語る機會のなかつたことは遺憾である。

さらに、本書を開いてこの書が成つた原因を知るにいたつて深い感銘をうけた。著者は曾て、一冊の相當紙のくたびれたらしいシエイクスピアの作品集を手に入れ、その見返しに手記された舊所有者の斷章を讀んだ。それには「自分の數回におよぶエヴェレスト登山に、この書物は常に伴侶であつた。中にも忘れ難いのはカンチエソ・ジョンガ峰の二萬フイートの暴

風雪の中でこの書物を唯一つのなぐさめとして過ごした日々のことである」という數行に深い感銘を打たれ、本書の筆を起すこととなつたと記されている一事だつた。舊所持者の氏名は明らかにされてないが、ヒマラヤの登山に關心のある者だつたら、その經歷から押して今は故人となつたフランク・スマイスであることは直ぐ想像される。しかもこの「山岳文學序説」の力作が、世界の最高峰エヴェレストが遂に登られ、またわが國からも相次いでヒマラヤ遠征隊を送り出した年に世に出たとは、日本の登山史にとつて大きな喜びといわねばならぬ。

内容は「序説」とある通り、わが國の近代登山の夜明けともいふべき明治三十五年（この年始めて小島島水氏が北アルプスの槍ヶ岳に登つた）から、四十年代にわたる登山紀行を詳細にあさり、その文學的な記文を紹介し、東洋的な逃避思想を基幹として論評を試みたものである。そして特に時代的雰囲気や、文學思想の推移をバックに開拓者としてのロマンティックな情熱を傾けた小島島水の「雲表」や「山水無盡藏」、あるいは志賀重昂の「日本風景論」、初期の「山岳」などから代表的な記文を抜萃し、日本的な新しい山岳

文學成立の跡を克明に探つてゐる。そして「目的と方法、資料」にはじまり、「山岳文學の時間様式」にいたる七章に分けて論評し、まとめあげたもので、これまでも手がつけなかつた處女コーズを開拓した努力の結晶である。そして第五章の「ロマン的山岳の黄昏」で自然主義の勃興を説き、大正年代に移つて頂上を極めるための探検的な山登りは一段落を告げたことを明らかにし、一方スキーの導入によつて冬季登山の分野が生れ、さらにロック・クライミングや極地法登山などの新様式が起つて現代にいたつたことが説かれてゐる。

ここにおいて山登りはもはや人間の社會生活からの逃避や超越ではなく、むしろ人間社會と自然との交戦という對象におかれる傾向が著しくなつたことを解説してゐる。しかし本書の記述はあくまで「序説」であつて、この種の近代登山の精華ともいふべきスポーツ・アルピニズム、もしくは世界の屋根で人間と自然との激しい闘争が取上げられていないのは残念な氣がする。しかも著者は例のシエイクスピア本の見返しの手記に深い感銘を寄せ、世界の屋根を吹きまくる烈風に抗して山と取つ組む壯烈な山登りの光景を想像し

「オセロの悲しみや、リヤ王の怒りも、マクベスの宿命も、それぞれ宇宙的なものに成長し、暴風雪と共に荒れ狂つてゐるではないか。これは一つの超越、人間のなものから人間のならざるものへの超越である。カンチエソ・ジョンガは幾多の前山をめぐるして天の一角に卓然とそびえていて、およそ地上に根を下してゐるもののように思えない。……わたしは本文のいたる處に引かれたアンダーラインから、かの超越的な風のようなりを少しでも聞き出そうとするかのように心ひかれて眺め入つた。この氣分、かかる超越をとりあげ、日本文學の中からたとえ少しでもそれらしいものの痕跡を探り出そうという氣持が、わたしを山岳文學研究へと向寄せたのである」と述べてゐるのだから、著者にとつても「本論」に手を染めずに早世したことは最大の遺憾だつたに違いない、日本の山岳界にとつても大きな損失である。

特に筆者がエルゾグの文學の香り高い「アンナプルナの登頂記」を讀まずに世を去つたことも、故人だけの遺憾ではなからう。

(東京都目黒區中目黒二丁目五八〇・塔影時社發行・非賣品)

× × ×

ヒマラヤの印象

マナスルゥより歸つて

＝山崎英雄＝



始めてヒマラヤの連山を見たのはカトマンズに入る手前の飛行機から眺めたときであつた。ポストモンズンでは、大氣は澄んで、エヴェレストからアンナプルナにかけてすばらしい山なみが見える相であるが、我々が見たときには大氣がすすんでいたせいか、第一印象は割にうすいものであつた。カトマンズを出てから五日目、高い尾根の道に出てヒママルチュリ、ガネッシュヒマールの山々を見たときには、さすがに立派なあと歎聲を上げた。マナスルゥはこれ等の山より更に高いのかと思ふと、まだ見ぬ指す山をあれこれと想像して胸をとどろかしたものである。

サマの下の、ローの部落から始

めてマナスルゥの全容を見ること出来るが、午後此のローの部落に着いたときには、マナスルゥは高い積亂雲にかくれ、わずかに中腹の斜面が雲の間から見えがくれするだけであつた。一回双眼鏡を手に、頂上は雲のどの邊にあるだらうと話し合つていよううちに、突然雲の上に鋭い双頭のマナスルゥが出てきたときに、これは大變な山に來たと思わずにはいられなかつた。しかし夕方になつて雲がすつかり晴れて、マナスルゥ全體が見えたときには、いやに平たく、低く見え、先程のすごみは感じられなかつた。

此の最初の驚き以來、高さや、大きさに壓倒されることも少かつたが、第二キャンプから第三キャンプに登る途中、東尾根の氷の一部がかけて、マナスルゥ氷河に落ち、雪煙が約二千米も巾のあるマナスルゥ氷河を越えて、ナイケの下を歩いてゐる我々の方に押し寄せた。第三キャンプへと續く赤旗が、先の方から次々と風にあふられて、爆風の近ずいて來たとみるまに、我々は約五分間も雪煙の中に入つてしまつた。雪煙は更にナイケの方に昇つて行つたが、此の時は一同啞然として、ヒマラヤのスケールの大きさに舌を巻いたものだつた。

★ ヒマラヤのスケールの大きさに ついては前々から話もきき、自分でも馬鹿でかい空想のヒマラヤを作つていたせいか、はるかに想像をこえるという程のこともなかつた。

しかしマナスルゥ附近の開けて

いることは想像以上のものであつた。ヒマラヤは高山であるが深山ではないと云う人もいるけれど、今度の場合には特にそれを強く感じた。プリガンダキの道は、チベットへの重要なルートの一つであるとはいへ、あれ程人通りが多いとは夢にも思わなかつた。

雪の上の生活が、もう一カ月半近くにもなつた第七キャンプの休養の日など、双眼鏡で下の新緑を眺め、ラルキヤ峠へと登つて行くヤクの群を算えて、高いには高いが、ずいぶん人臭いと思つたりした。

★ 又森が少いと云うことも、北海道で育つた自分にとつては深山という氣がしなかつたのかも知れなかつた。

★ 更にもう一つ、想像以上のことは氷河の上の暑さであつた。外國の本などには、ヘルメットをかぶつて氷河を歩いてゐる寫眞などもあり、日中の暑さのことも出てはいるが、今度の場合は想像をはるかにこえるものであつた。殊に暑く感じるのは薄いガスがかゝつたとたん、此の時はむつとする様な猛烈なものであつた。四、五千米あたりでおおる頭痛なども、高山病と共に強烈な日光による日射病もあるのではないかと思ふ程であつた。暑いと云つても、直射日光の強さであつて、氣温は勿論五、六千米で、日中、○度前後であつた。

ノースコルに出ると、コルを吹きぬける風で、あらゆるものを身につけても汗をかかない様に、第七キャンプあたりとは全く違つた

感じを受けた。アンナプルナの様に北斜面を主に登るルートはさぞ寒かつたろうと思ふ。それとくらぶればマナスルゥの今度のルートは途中の暑さなどは、暑いなどゼイタクは云つていられないものである。

一九五四年マナスルウ隊の入國許可

本年のマナスルウ隊長三田氏が下山後カトマンズに於て横會長からの電信に基きネパール國に對し一九五四年春季のエクスペディションの入國許可を申請したが、右は去る八月九日カトマンズ發の電信を以て許可された旨受信、また續いて R.P. Manandhar 氏 (Secretary to Government) から I have much pleasure in informing you that my Government have granted your request for another Japanese Expedition to Mt. Manaslu in the spring of 1954 云々と書かれた。八月九日附の許可通知が届いた。

山と森の歌

小野 幸著

生活の中の山

B 6版 二〇〇頁
二八〇圓 朋文堂

著者はなかなか趣味の廣い山岳人である。山といふものはいろんな角度から愉しめるものだ。趣味の廣いといふことは、それだけ山をいろんな角度から愉しみ、味う

ことができるわけで、この書はそうした著者が自分の山や山登りを愉しく描いた一つの記録といふことができるであろう。

自分の山登りを他に押しつけようというような文章は一つもなくきわめて謙虚に自己の山岳觀を語り、岳人達を追想している。肩をいからして書いたようなものはない。生活の中の山にふさわしい親しみのある隨筆やエッセイが多い。

巻頭にある「小さな村」が何といても最も著者の風格が滲み出ており、著者の山に對する態度を物語つてゐる。秩父の好きな著者だけにもつと秩父の山や峠に關するものがあつてもいいのにこの一片しかないのが惜しまれる。

竹村多門治や内野常次郎の追憶も著者らしい誠實さが溢れ、山に對する眞摯な考え方と共にこの書の支柱となつてゐる。

装釘も著者の自装である限定版だが、内容にふさわしい濃さと堅實さをもつており、わが國の山の本の中では数少ない部類の書といえる。難を云えば活字が装釘や紙質に對して稍々汚いのが珠にキズとでもいおうか。(K・W)

加納一郎編

山と森の歌

林業解説シリーズ B
6版 三二頁 四〇圓
日本林業技術協會

正岡子規、石川啄木から北原白秋、齋藤茂吉に至る十二大家の山に關する歌のみを集めたので重寶かつ楽しいもの、更に續篇の發行されんことを切望する。(W)

今シーズンのヒマラヤ

英國のハント隊によるエヴェレストの征頂について、獨逸隊がナンガ・パルバートに成功し八千米峰が二座頂上を明けわたしたが、K2の米國隊、ダウラギリのスイス隊、マナスルの日本隊は頂上に達しなかつた。

ダウラギリの到達地は、日本のマナスル隊が歸路ボカラでスイス隊と會つた際聞いたところでは、マナスルの到達地点と大體同じというから七七〇〇m位か。K2の米國隊も七九〇〇m位から引返し

たようだ。また在アフリカの英人二名による小パーティがマカルウ(八四八九m)へ向つたらしいがこれは偵察の範圍を出ないものだらう。七千米級ではガネシュ・ヒマールを目指したニュージールランド隊はガネシュの征頂に失敗したが、八月下旬歸國した中尾隊員の話ではシアル・コーラの北側に聳えるスリンギ・ヒマール(七一七七m)の登頂に成功した。インドのパーティはパンチ・チュリに成功し(別記参照)、そのほか英國の一隊が西ネパールのアビ山群に入つた。この隊にはエヴェレストの古顔ベントレー・ビーサム氏が加わっている由、やゝおくれてカシミールのヌンを目指して入つたフランス隊は最近ヌンの登頂に成功した。

ポスト・モンスーンの登山隊ではアンナプルナIIをねらう日本のAACKの隊がさががけて、イ

ンドからパンディム(シッキム)を目指すパーティが出るようだ。(M)

★パンチ・チュリの初登頂

アルモラに近いガルワール・ヒマラヤの未登峯 Panch Chuli (22,650 ft.) が去る五月廿六日 P.N. Nikore の率いるインド遠征隊によつて登頂された。隊は隊長 Nikore, V. Ramnathan, K. M. Roy, Vinod Biharial Bhatnagar の四名で、シルバのアジバが参加している。五月十四日一五〇〇〇呎にBC、十七日一九五〇〇呎にC2、廿二日にC3を設置した。

パンチ・チュリは一九五〇年マリイの率いるスコットランド隊が試み、昨年は獨人ハートラーが二一四〇〇呎まで登つてゐるが、七千米に足りない山としては相當手強いものとして、未登のまま残されてゐたものである。(T.M)

AACKアンナ・フルナへ

京大學生會山岳部員今西壽雄氏を隊長とするアンナ・フルナ第二峯遠征隊は八月廿日羽田發のBOAC機で伊藤、舟橋兩氏が先發したので本會では同日午後八時から體協食堂で壯行會を開催乾盃した。本隊は五日SAS機で壯途に就いた。

隊員の顔觸れは左の通り。(平均年齢二九)

| | | | |
|----|------|-----|------|
| 隊長 | 今西壽雄 | 30才 | 一九三九 |
| 隊員 | 伊藤洋平 | 38 | 一九四五 |
| | 舟橋明實 | 28 | 一九四五 |
| | 立平宜夫 | 28 | 一九五三 |
| | 藤平正夫 | 28 | 一九四三 |
| | 勝坂誠 | 27 | |
| | 藤村良 | 26 | |

★マナスルの報告書

今西隊、三田隊二回に亘るマナスル・エクスペディションの報告書は『マナスル一九五二—三年』と題し今秋十一月下旬、毎日新聞社から刊行の豫定で目下鋭意準備中である。執筆者は兩隊長を中心とし數人の隊員が協力する。B5判クロース装、寫眞五十餘頁、本文約一五〇頁、地圖數葉、豫價六〇〇圓。

テンシンのピツケル
麻生武治

エヴェレストの登頂にヒラリーとテンシンの一行が使用し、而してテンシンが國連はじめ、英國、ネパール、インドの四ヶ國旗をつけて頂上に立てたアイスピッケルは、瑞西アルプスの山村グリンデルワルドのアルフレッドベントの製作で、最近ベントから届いた私信の中にも、七月中旬テンシンがベントをグリンデルワルドに訪れ語つたところを知らせてきたので、その話を御紹介しよう。因にテンシンこそ頂上一番乗にふさわしい人で、ネパール生れではあり、エヴェレスト攻撃の回数から

みても、ヒマラヤ山岳地帯踏破の経験からしても、彼の右に出る者はあるまい。さて彼の語るころでは、昨年の春スイス隊のラムベールとテンシンはほとんど頂上近くまで行つたのだが、退却を餘儀なくさせられたのは、スイス隊は成功をいそいで徐々に進むべきアクリマチザチオンをいそぎ過ぎて早く頂上攻撃にかつたこと、最悪の天候にめぐり遇つたこと、その上従來誰にも先鞭をつけられていないサウスコルから先の未知のルートを試みねばならなかつたことが挙げられてゐる。

かてて加えて、隊員全體の體力技術に非常な優劣のあつたことも指摘されてゐる。其點は今夏成功の英國、ニュージールランドの混成隊には、其の差は著しくなかつた

由、かかるテンシンの言葉につけ加えてハント隊長も、スイス隊は今回の英國隊よりずつと重くて操作のむずかしい酸素吸入器を持つていた不利もあると云つてゐる。尚ハント隊長は記者會見に於いて英國エヴェレスト遠征隊が廿年も苦勞した、エヴェレスト北面のルートについては、ロンブーク氷河をつめる北側ルートは、七千米迄は南面よりずつと樂だが、それから上に悪場が多く尋常ならぬロッククライミング・テクニックが必要だらう。又、ヒラリー氏は語つてゐる、ヘリコプターで頂上に降立つことは不可能であり、酸素吸入器も絶対必要であつて、それ無しに登頂しようというならば、先ず以つて超人間を創造するより方法はないと云つてゐる。

登山用具の専門店

好日山莊

プライスリスト進呈

東京店

中央区銀座西二ノ五

電話

海野治良

電話

京橋(56)3600

大阪店

北區堂ビル前

協和銀行三階

西岡一雄

電話

三階

神戸店

生田區三宮町一ノ三

電話

野田真之助

電話

三ノ一



朝日連峯の登路について

藤島 玄

第七回國民體育大會の入山式の日、酒田市立圖書館を訪れて小生の新提唱出羽三山(鳥海山・月山・朝日岳)の資料漁りを試みたところ、館員各位の御厚意によつて『大泉叢書』中、朝日連峰の山階道の古文獻に就いて御教示を得た。

山岳第二十九年第二號「慶長年間の朝日連峰道路に就て」住藤榮太氏の記事を補足する意味に於て阿部正己著、酒田市長(稿)の内より關係記事を報告してみた。

上杉氏時代 十五 直江兼續の朝日山 山道開鑿

上杉氏が越後を領せし時代に、その所領莊内との交通は他國を經由せずして、海岸通りを通行したり。慶長三年一月、上杉氏が越後より會津に轉封を命ぜられしよりその所領米澤と莊内との通路は六十里越を最も近しとす。然るに莊内櫛引郷より六十里越を経て米澤に至るには、最上氏の領なる村山郡を通過せざるを得ず。依つて米

澤松ガ崎城主直江兼續は米澤と莊内との直接交通路を必要とし、且つ當時、兼續は石田三成と家康を撃たんとせしかば、愈々この通路開鑿の急務なるを認めたるものなるべし。莊内と米澤との間は、最高六千餘尺の朝日連峰を以て遮られ古來通路なし。これに通路を開きたるは慶長三、四年の間にして、豪膽勇圖の直江兼續の企てたる所なるべしと雖も、開鑿工事に關する資料なきを以て、その經過を徵す術なし。

ただ、田川郡櫛引郷大島村、肝煎半三郎持傳、文祿元年の「尾浦殿山階道書」あるのみなり、その記述にかかれる山道の地名には誤あるまじければ左に掲ぐ。

櫛引郷田澤組大島村百姓半三郎持傳候山階道書付(但半紙横折帳面なり。本書は近き頃、行者鐵門海が無心に付き遣わし候由なり)出羽莊内大山尾浦尉山階道

みち行改帳 鱒淵村より 蝶崎坂より 詠坂也 蟻越峠向 岩越峰 折渡り 早坂 甲トの明神 高安の明神 日影の次 御殿御小屋の處

この次に今野御自書の處 葛木天狗松 鐵砲休 貉森 編蝠が谷 六十三本坂 八熊嶽 御田峰 馬ノ背 冷水嶽 三角 馬塚 右の方に大池あり。大峰に御坪跡あり。貳間斗りの名石有、さくらよと申妾死る所 庄内・越後さかいの大峰。

楮か嶽 百間斗りの糞の川原有、此處に青草なし。 兎いぬが平 駕籠休み さざき森 (みそさざき森) 幕張り松 鷹休

み 鐘立坂 五葉の松 さわら木連理の枝 山葵澤 朝日嶽と申三角山也 一方は米澤へ流、一方は小國へ流、一方は大井澤分に、さながら本來は庄内分には無御座候 三十三本坂 人揃の峰 小鳥狩坂 五月六日しやうぶと申所 狐化平 杖立坂 御殿小屋平 木立原 藤原峠向 荷物改の平 種が島 鐵砲筒拂の森 米澤領長井草岡村へ出 是より會津御城下迄貳十餘里。右之道尾浦尉山階道書置如斯御座候。古き書置は虫喰やぶり段々書置申候。此度御糺の趣奉畏候。 文祿元年 山奉行 榊原三太夫 坂口源太左衛門 大坂御役所 御大老 徳川家康

これに據れば最初の山階道書置は虫喰のため廢捨され、時に寫し傳えられたること明かなり。依つて、年號及び御太老徳川家康の記事は虫喰のため缺失したるを、記憶にて書きしものか、或は誤寫にして、文祿元年に山道を開鑿すべし理由なし。

この外に、元和二年辰八月十二日、榊原三太夫一名の奥書ある「尾浦尉切通」と題する一通ありて少しの差違あるもの如し。前記三十四、五所の地名は多少の誤寫ありたりとするも參考の價値あるべし。然るに今日傳う所の地名とは大部分符合せずして、僅に田川郡大島川上流の鱒淵村よ

り大鳥湖の東を通り、朝日嶽の山頂を経て葉山に下り、西置賜郡西根村草岡に達することを知り得るのみ。 山階道書置の地名と現在地名(陸湖五萬分一地圖)を對照するに左の如し。 山階道書置 現在地名 一 鱒淵村 同上 上田澤より大鳥川沿いを離れて東南に在り、之より山頂を傳いて登りたり。 二 甲トの明神 兜岩 正保庄内繪圖には明神山とあり。 三 高安の明神 高安山 正保庄内繪圖には高安山とあり 四 葛木天狗松 葛城山 五 三角 三角池か 三角池は大鳥池の西北隅に在れば此地を通る理なしと雖も地名は一致せり。 六 馬塚 右の方に大池あり この地は大鳥池の東方に在るが如しと雖も今この地名の有無明かならず、大池は大鳥池を外にして他に無し。 七 大峰 以東嶽か西朝日嶽か明かならず 八 朝日嶽 同上 朝日嶽以南は米澤領にして、草岡村に至る間の地名は現在地名に符合するものなし。 九 草岡村 同上 十 波山 葉山 慶長四年正月の草岡文書に在るものにして現在葉山とあるものなり。 同稿はなお長文のもので以下種々古文書に依つて考證してゐるが、殆んど「山岳」の記事と重複

するので轉載を避け、最後の參考の部にある莊内藩の「山道書上」を記すと 「蘭隱筆乘」 一 元祿十年丑三月 公義へ書上候本郷組田澤繪圖書入左の如し。 一 義光と景勝と取合の時分、景勝方より庄内へ新道切候欠間 一 朝日嶽より庄内領上田澤村迄 六十里 一 同所より長井領内草野川村迄 六十里 慶長十四年に新道切付、同十七年迄人馬通路仕、其後御當代に成道留り申候。 寛文十二年子三月古來の繪圖、

この書上の慶長十四年新道切付の誤謬であることは前述の通りで明かなる所であるが、この山道も必要とする領主を失つて三四年の間に荒廢に歸したことがうかがわれる。 山岳 第二十九年 第二號の朝日連峰道路に就ての文中の古文書は左の如く訂正すべきであらう。

正誤表 頁行 誤 正 5 5 ては山 て、波山 6 あひその あひえさわり 12 まげし役 まげしやく 13 御番堅固に 御番に堅固に 山々入分山川共 山々入分山川共 者や 者也 9 16 役儀 役錢 10 12 役儀 役錢

以下11頁四段につづく

第八回國體登

山への注意

第八回國體登山もいよいよ一月後に迫った。本會ではその實施要項を各關係方面に通報したが、會員諸君のために要項中から特に次の諸項を抜萃して御參考とするから十分研究されたい。

I コース

ABCコースを選手コースとしDコースは監督、オープン参加者その他のコースとする。

A 第二日 西條 加茂村役場前

第三日 笹ヶ峰 伊豫富士 瓶ヶ森 ヒュツテ

第四日 土小屋 石槌山 面河

山一面河

B 第二日 西條 西之川 常住

第三日 土小屋 石槌山 土小屋 筒上小屋

第四日 丸瀧山 金山谷 谷合一面河

第五日 西條 河口 成就 石槌山

第六日 土小屋 瓶ヶ森 ヒュツテ

第七日 土小屋 丸瀧山 金山谷 谷合一面河

第八日 西條 西之川 常住

第九日 瓶ヶ森 ヒュツテ

第十日 土小屋 石槌山 面河山一面河

第十一日 淡谷探勝後バスにて久万に下る。

全選手はだいたい三等分しABCコースに配属、學生はA女

山上展望

今年の夏ほど天候の氣狂いぢみた夏はなかつた。平地における水害の瀕發はやはり山にも豪雨をもたらした。白馬の南股では四人の登山者が濁流に呑まれた。その他アルプスが若い生命を失つた者の數も少くない。

新聞ではエベレストの登頂に刺戟されて登山熱が昂つたように報じられているが、果してエベレストの意義をほんとうに認識している若い登山者が、どのくらいあつたであろうか。

たしかに山に登る人間の數は著増して戦前を凌ぐくらいに形勢である。だが山の中や列車内における彼等の言動をし細に觀察すれば登山の復興を手放して悦ぶわけに

も參らんようだ。

「モンブランの怒り」という歐洲映畫が久し振りで上映されたが、東京の一流新聞の映畫評にモンブランの風景が長々とほめてあつた。しかしあの映畫に出て來るモンブランは最後の方に一カットしかない。他は全然モンブラン以外の山である。山岳映畫としては他愛もないもので戰前より退歩しているという他はない。

何もかも戦前の水準より下落しているようで何だか淋しくなつてくる。この憂うつをふつ飛ばしてくれるのがヒラリーとテンシン。マナスルも第二次遠征の入國許可がおきた。來年こそマナスルの頂上をわれらの足下に！（破）

子はCとして一般選手はその希望を考慮して何れかに配属。監督は選手とは別にDコースに配属し監督團長の指揮に従う。オープン参加者その他はDコースに配属、オープン團長の指揮を受ける。

II 編成及び統率

各縣單位の選手三名を以て一隊を編成、その中の一名が選手リーダーとなつて隊を統率、五隊を以て一班を編成、これを技術役員たるチーフリーダーが統率する。

チーフリーダーは技術委員長長の指揮を受ける。技術委員長及びチーフリーダーには技術役員たるサブリーダーを一名以上と所要の補導員を配属する。

III オープン團について

オープン團は都道府縣の豫選に参加しかつ豫選責任者の推せんある者を以て編成するが、その人員は選手に限り、その参加許可は東京本部で行う。

監督團及びオープン團の事故については出来る限りの對策を講ずるがその責任は負わない。

技術役員は従來通り選手に登山の講習資料を製作すると共に積極的にこれを統率し指導するものとする。

IV 服装その他

石槌山の標高は一九八一米だがバスの終點は海拔七〇米、標高差一九〇〇米あることを念頭におきトレイニングを怠らぬようにすること。霜のおりる山に登る心構えと準備が必要で靴は登山靴、寝具、食器携行のこと。

V 石槌山について

四國アルプスの著者北川淳一郎

氏は「石槌山は從來二つあつたよに思う。所謂「お山登り」の石槌や、社會主事補が連れて行く青年團の石槌が其の一。これは三箇の嶺を登つたところ、石土毘古を祀つた神社のある、あの峯である。若し石槌の本體が此の狭い石槌のみに限るのであつたならば、石槌山は最早、天下に誇るべき等の特殊價値のないもの、隨つて登山家の登るに足らない山となつてしまふ。然るに此の狭義の石槌の外に尚一つ、廣義のそれがある。それは、お山登りの、所謂狭義の石槌は勿論「彌山」と云ふ「天狗、西冠、二ノ森」を含む大山塊、大體に於て、東西にS字形をなせる一大山塊の全部を云ふのであつて、此の意味の石槌こそ、實に瀬戸内海を航行する船中から仰ぎ見て、過去、現代の幾多の人々が、其の偉大にして、壯觀、典雅、優麗な英姿に、思わず襟を正すと同時に、詩興の動いた。あの「伊豫の高嶺」に外ならない。」とその本の中に書いてある。大正十四年に出版された本だから、その章の終に我等四國人は、將來の登山家のために、これらをその純粹なる形式に於て保存すべき義務をもつてゐる。翼くは四國アルプスの其の純潔なる處女性が永遠に汚されざらんことを……という著者の希望が果して叶えられているか、どうか。

最近の石槌山については會報一六一號に望月理事が、また本號には會員の村上氏が書いてあるから參照されたい。

所要地圖 西條新居浜・日比原石槌山

昭和28年度版

山日記

定價 ¥ 230



昭和29年版 11月中旬出来
特輯記事 山岳圖書解題
予 ¥ 250 続高山植物図譜。雪
について。積雪量調査。

東京 茗溪堂 神田



會員通信

内蔵助平から立山

日高信六郎

冠さんのお話やら名須川君の旅行談やらにそのかきされて今夏は古澤幸君と内蔵助手に出かけました。

八月四日から八日間、大町の丸山充嘉他一人をつれて針木峠を越え黒部川を下る。平小屋の河原で思いがけなく温泉に入ったり、御山谷の關西電力の小屋で御世話になりました。この補給は越中側から御山谷を経る新道によつています。下廊下の榛の水平には會社の人夫が三十人ばかり入つて下流へ歩道再開工事中なので、平から路はよくついでおり、内蔵助谷まで半日で行かれます。谷の入口を扼するオオタテガビンの絶崖はすばらしいです。下流から十字峽までは既に歩道が出来ているから來年には昔の様に下廊下をずつと通して歩けることになるでしょう。

山旅の前半は毎日晝すぎから雨がふつたため、内蔵助谷の合

ら内蔵助平の間に三度もテントをはらされましたが、その間だれにも遇わず、立山連峯と黒部別山の間に横たわる珍しい高原の一角に白砂と青草の原を見つけてテントを張り、鳥の聲に聞き入り星を仰いで過した一夜は素敵でした。黒部別山も目標の一つでしたが、ハシゴダン乗越まで上つて見て、あまり藪がひどいので割愛し、内蔵助谷をつめて雪溪をのぼりカールの底からはい上つて縦走路を歩く立山のぼりの人たちを驚かせたのち、尾根通しを剣にのぼり長次郎谷を下りて池の平にまわり、阿曾原から電車の御厄介になつて水のかれた黒部の谷をいたみ乍らも名剣山や百貫山の昔にあらぬすばらしい岩塊を見上げて心を慰めました。

針木、平、立山、剣、黒部川など私には丁度四十年振りの再遊なので、今更のように物珍らしく、山が開けたことや登山者の風情の變つたことなどをしみじみと感じました。今年には雪が早くとけて悪く歩きにくかつたが、ベトトリと遠松のみどりをままとつた岩峯に喰い込む雪溪を仰ぐと、若い人たちと同じ氣持になつて北アルプスの魅力を身うちに感じるのです。

露營指定地における空罐や用便の處置など登山家に対する注文も多々ありますが、驛からすぐ山に向う大ぜいの登山客のために、大町や宇奈月の様に広い待合室をもたぬ驛では驛前にテント張りでもいゝからユックリ休んだり荷を仕別けたり出来るところを設けてほしいと思います。尚大町で若い案

内者の養成に意を用いていることを知つたのは愉快なことでした。

船形山

沼井鐵太郎

二十何年かの昔、佐々保雄君等と大倉川支流の悪い澤から入つて二ツ峰、蛇、船形とさまよい歩き観音寺道を神町に下つたことがある。そのもつと前の私の在仙時代から船形山の北西の谷、丹生川の秋の探行をやつてみたいと思ひながらつい今まで果せなかつた。時炎暑の八月十日夜行で十一日から單獨行、尾花澤から銀山温泉バスを利用し丹生川筋のトラツグ道を營林所現場事務所まで歩き、その後すぐ先の夫ノ小屋から下りて、その谷筋をじやぶく上る。雷雨によつて道元の惡魔の上勝手な所に野營、十二日所謂「層雲峽」を通過し終り御寶前の先の長い鎖場をよちて大滝（男滝？）の澤の上に越し、頂上まで約二百米の所に野營、この日の終りに山形大生を含む一行三名と尾花澤の一行五名とに逢い同じ所に泊る。大雷雨でつぶぬれとなり山大のテントに逃げこむ。

十三日單獨先發、澤をつめ二三十分やぶと苦闘してやつとのびやかな船形山背（御所山）に着、頂點お宮の稍北西寄り、下山は宮城縣側の升澤道ととり、嘉大神の分岡場で泊めていたゞき、十四日吉岡、仙臺を経て歸京。船形の宮城側登山道は長いが緩やかであり、景勝と登山気分は山形縣の方が私の好みからいふと遙かに優つてい

る。丹生川峽流と観音寺道は東京からわざわざ出かけていても悔る所なき立派なものと思う。

銀山平、檜枝岐、尾瀬

望月達夫

小出に下りた時は小雨が降つていたが、大湯の先まで拾つたトラツクにゆられて技折峠を越え、細越で車を捨てた頃は雲も切れて夏の陽が輝やっていた。浪拜の露天湯につかつてゆつくり休み夕刻大津岐の星大四郎方に一夜の宿を乞う。

二日目、大津岐峠へ登り會津駒まで山の背を北へ辿つた。霧が濃くコバイケイソウとナンキンコザクラのお花畑に慰められたゞけで眺望には恵まれなかつた。檜枝岐の旅宿に一泊して三日目は沼田街道を南下し七入から燧の裏林道に入り、深林の處々にあらわれる田代から平ヶ岳の眺めをたのしみつゝ尾瀬ヶ原へ出て檜枝岐小舎に至つた。

四日目は沼尻から燧岳に登り温泉小舎へ下つて三條瀧を見物、檜枝岐小舎に再び泊り翌日は三平峠から下山した。どの小舎も満員という盛夏の尾瀬も、銀山平や檜枝岐は人が少く、大津岐峠から會津駒をかけた一日の如き終日逢う人もなく、裏林道も二、三人の登山者に出會つたのみで洵に静かだつた。この林道は處々にひらける田代と遙かに望まれる平ヶ岳の眺めをもつた楽しい山路であり、大津岐で食べたとりたての岩魚と共に印象に残つた。

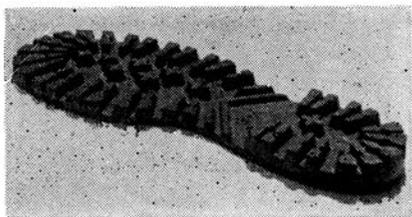
金庫の御用は國末へ

東京國末金庫株式會社

東京都千代田区神田神保町 1-44
TEL (25) 4366 3895

八重洲口營業所

中央區具服橋二の五
東京驛八重洲口下車
鐵道ビル筋向イ角
電話(27)五六五四



山友社 高橋靴店
東京都新宿區三榮町3
電話 四谷 (35) 1929

蓮華温泉より朝

日岳へ

板倉 黎子

八月初め蓮華温泉に滞在中朝日岳へ登りました。陸測五萬分の一の地圖に載っている白高地澤の右岸に沿つた道は廢道となり、現在は大所川の釣橋を渡り、更に白高地澤を左岸に移り、五輪山から派出する尾根の屈曲部に取つき、尾瀬を小規模にした様な濕原の間を縫つて登ります。残雪も豊かに池塘は白雲を映し、ニッコウキスゲ、ヒオウギアヤメ、ナンキンコザクラの群落が美事でした。頂近くの砂礫地にはシロウマアサツキ、ミヤマムラサキ等々高山植物も極めて豊富で徹頭徹尾お花畑に送迎される道なので、しまいには審美眼も麻痺して路傍のべん／＼草位にしか感じなくなる有様でした。頂上直下の大きな残雪の傍に山頂朝日小屋(石室完全、水便、無人、二間に三間、富山縣側のイブリ平にある朝日小屋とは別)が建つています。

朝日岳の遠望はピラミッド型ですが實際には堰松の間にタカネイバラの紅い花の咲く高原状ののびやかな山頂です。剣、立山方面の眺望に勝れています。白馬と較べ訪う人も稀と見え、終始人間には會いませんでした。歸途は再び蓮華温泉に戻り、野天風呂に汗を流しながら黄柝れて行く朝日岳、雪倉岳をしま／＼と眺めました。(蓮華温泉より往復約十時間)

男體山

吉田 功
野口 末延

温泉を湯元からひいた中禪寺湖畔中宮祠の宿を出て、二荒山神社から表參道を男體山頂上に登り、志津小屋を経て水の濁れた荒澤に沿つて下り、精銅所荒澤の社宅へと、新緑と満開のツツジの美しさを満喫一日の静かな山旅を味わつて来ました。

頂上では雲海の上に富士と南アルプスが遠望出来、又日光を圍む山々は残雪の白根を盟主として南は皇海から北は女峯邊迄が間近かにそれらの背後には武尊、至佛、燦、會津駒ヶ岳等の未だ雪の多い山々と更に東へ見知らぬ一帯の白い山を遠く望む事が出来、曇りながらも眺望には恵まれました。

志津小屋へは折好く此方面より登つて来た學習院山岳部の人達の足跡で數ヶ所の残雪から、路を失わずに下る事が出来ました。小舎は路を狭んで西側にありますが、北側の大きい方には一部雨戸と床があるので、寝具さえあれば数人が泊れそうです。(二八・五・三二)

ピブラムは唄う

小田部 學

初めてはいいたゴムの山靴マチガの雪溪にくい込めば、ナイゲルさんが横目でにらむ私の仲間がマナスルで

永遠の雪をふんでいる

ぬれた岩には泣かれたわらびのタワシにや負けました

私の仲間はマナスルで

氷の岩を登っている

乾いた岩では思つたとおり

トリコニ滑るスラブの上に

立てました 立てました

私の仲間はマナスルで

足をぬらさず歩いてる

グリセード初めはこわかったけれど

ナイゲルさんより滑らない

これで安心ゴムの山靴

私の仲間はマナスルで

アイスフオールも越えたとき

岩のゴロゴロ下りみち

ナイゲルさんはしかめつら

私しや唄うよピョンピョン

私の仲間はマナスルで

頂近し唄え 唄え

(六・一三谷川岳にて)

晩春の石槌山

村上 金吾

徳島を夜行で立つて高松經由、伊予小松に下車したのは翌朝の三時半。七時四十分には驛前を發車する一番の土居行バスで、河口(こうぐち)までゆき、その宿屋でルツクや水筒などを借りて出發したのが九時すぎでした。

今宮部落まで三十分、成就社まで今宮から二時間。朝早く河口、

今宮を立つた登山者達はもう頂上を極めて成就社あたりに来ていました。私は一人、膝をいためていたのでゆつくり歩いて第一のクサリの下には午後一時三十分、頂上は二時二十五分でした。第二のクサリの下あたりから残雪があり、頂上は南側から吹きあげる物すごい風のためながく止つていられませんでした。

私は膝がわるいので下りには一層時間がかかり午後七時河口につきました。終發のバスは立つたあとなので、そこに一泊、翌朝六時發のバスで小松に出て、高松、宇野を回つて釜石に歸りました。こんどの石槌行が短い時間に都合よく運べたのは、本會の原氏と十龜氏(石槌山岳會長)の御配慮による

ところ甚だ多かつたことを特記し、厚く御禮を申しあげます。

初夏の立山

早川 和宏

弘法小屋の清水を求めて一行は冬から覺めたばかりの無人小屋に一夜を宿した。夜、彌陀ヶ原を吹きすさぶ寒風は遠松をざわめかし、嵐の切れまには稱名瀧の音がかすかに聞えた。銀河は霧のように稱名川を横切つていた。

翌朝晴天にめぐまれ朝風は霧を率いていつた。一行は小屋を後に雪溪を歩いて立山頂上をさきわめ、原始の世界を楽しんで下山した。

新人を救う

当店の
用具

秀山莊

TEL(56)一八六一



若い人達がヴァリエーション・ルートに血眼になつていた頃、比較的訪れる人も少かつた八ツ峰、源治郎尾根は、一時は踏跡も次第に薄れて行くのかも見えたと、近頃の潤澤の混雑の影響なんかもあつたりして、結構またにぎやかになつて来た。部分的には崩落が激しくて、様子のすつかり變つてしまつた所もないではないが、八ツ峰、源治郎尾根の一般ルートは、戦争前とちつとも變つていない。我々が十数年前に使つて登つ



劍岳あれこれ
金坂一郎

たホールドが、そのまま同じように今日でも使われている。八ツ峰の四峰から五峰に移るときに、ちよつとした悪場があつて懸垂を用いる所がある。こゝでは昔は小さな岩の切りかきに、不安定なザイルの掛け方をしたものだ、この頃ではこの岩の少し上に立派な岳樺が生長し、しつかりとこれにザイルを掛けることが出来るようになった。以前はこんな木には気がつかなくつたのであるが、恐らく十数年前には、この

樺もピンとしては使えなかつたに違いない。こんなことに出會つたりして、つくづくと年月というものを考へたりする。

八ツ峰を終えて、池の谷乗越あたりで一服つけていると、ガスの中に自然落石の音が聞こえて来る。落石の音は別にして、とに角あの邊は静かな所と相場が決まつていた。しかし、この頃は割ににぎやかで、お天気がさほど悪くない限り、チンネの壁にかぶりつく連中か、三窓から縦走してくる人達に出會うものだ。尤もにぎやかといつても日没寸前まで、誰かかれか歩いて別物だ。昔の人はよく夜の墓場はにぎやかだ、ということをいふが、池の谷源頭附近のにぎやかさは、そういつた種類のにぎやかさなのである。

岩登りといへば、小屋で會つた或る學生は、雪の上を歩くのがこわいからすぐ岩にとりつくのだと、素直に語つて呉れた。雪上訓練の傳統的方法を持たない團體では、勢いこつた傾向に走るのは無理もないことであるが、雪山、剣に入りながら、雪を知らずに歸るのはまことに惜しい。

二、三年前の或る夏の夕方のことであつた。八ツ峰一、二峰のころから落ちるクレヴアスだらけのルンゼを、ザイルで確保しながらグリセードしていた隊があつた。登攀には失敗し、日は既に没して稜線のかなたにある。キック・ステップスをものにしていない人達にとつては、こつやつて下降するのが、最も早いと考へられたので

あろう。しかし私はこの光景を見たとき、もの悲しい感動にとらわれて、どうしようもなかつた。それは、遭難者の臨終に立會つたときよりも、なお一層淋しい光景であつた。

★ 今年の劍は雪が少かつた。ちよつと珍しいほどの大雨が續いたりしたが、もともと雪も少かつたやうである。少いといつても、部分的には案外多い場所もあるものであつて、場所により、毎年雪の残り方が異なり、また雪質も雪量とは直接の関係がないやうである。これは技術的に注意されてよい。雪が非常に少い割に、クレヴアスが出来にくい年もあれば、大雪にもかかわらず、澤がザクザクに割れることもある。

★ 今年、雪の少い割にクレヴアスが少く、雪質も意外に軟かつたので、雪をこなすことは割合楽だつた。しかしシュルンドに落ちて亡くなつた人があつたのは、お氣の毒なことだつた。

★ 長次郎谷の出合から、劍澤をわずか登つた所に、右岸にうまい水の出る所がある。私達の仲間はこの水を養老の水と勝手に名づけたりしていたが、この水を飲もうとして落ちたとか聞いた。前々から誰かやらなきや良いがと、氣にはかかつていた所なのだが、劍澤には一見大したことはないやうで、その實非常に恐い所が何ヶ所かある。長次郎谷や平蔵谷は一通りの技術を持つ限り、さして危険はないが、劍澤には案外ひつかり易い悪場がある。

北東より眺めた劍は仲々ユニークな存在で、さすがにちよつとしたものである。しかしこれは要するに「ちよつとしたもの」に過ぎないのであつて、劍を語つて別山尾根を忘れるわけにはいかない。ずつと若い人達にはいかに、別山尾根は興味がないかも知れない。しかし何へん歩いても、何時も心樂しいのは、八ツ峰の上半部とこの別山尾根とであろう。技術的に難しい所は殆んどなく、歩きながら見下す東大谷の深さにぞつとするのが關の山で、大したスリルを感じることもないのだが、「大きな山」へ来たという印象をこの尾根以上に鮮かに與えて呉れる所は餘りあるまい。

★ 劍の主峰が立派なドームであるといふことを、再認識させられるのもこの尾根を歩いているときである。一度や二度歩いたのでは、別山尾根ルートがどの邊を通つているのか、見當もつかない。そこでまた、劍の山の意外な大きさと峻しさに驚く。そのスケールは地圖を見て考へただけでは、良くわからないのである。

★ 主峰のドームは時によると頭蓋骨でも見るような、怪異な印象を與える。それはむしろ空氣の良く澄んだ夕方などに多い。が、本當の凄味を味わされるのは、やはり風雪や風雨のときである。

★ 或る夏の午後、ガスと雨の中を新人一人をつれて主峰から平蔵の頭を下つたときのことであつた。頼りにしているネル擦れも、雨のため明らかでないので、捨ておらじを目標に下降を續けた。しばらくするうちに、わらじも見えな

くなつたが、道がひどく悪くなつた。足もとはブカブカの岩ガレで手にふれるホールドは全部グラグラしている。気がついたときには東大谷を大分下降していた。このときばかりは、東大谷に向つて古わらじをほうり込んだ人達をうらむまいことか。

★ 戦後一時、山仕事に元氣に飛びまわつていた源治郎爺さんも今はない。しかし劍澤小屋は、何もかも昔のまま、例えば雨が漏ると、天井に小さな鍋や空罐をぶら下げるのも、昔のやり方と全く同じで、恐らくは、雨の漏る場所も昔と同じかも知れない。この小屋の經營者は今は佐伯文藏である。

★ この文藏が、去年は營林署に呼びつけられてひどく油をしぼられたやうである。なる程、あの邊で特に變つたことといえば、別山平の這松がひどく減つたことであらう。監督不行届といつたのでお叱言を食つたらしい。ちよつと澤を下りさえすれば、良く枯れた流木がごろごろしているのに、青々と立っていた別山平の這松帯も今では痛ましい赤茶色になつてしまつた。

★ 小屋でごろごろしているとき氣がついたのだが、この頃の登山者は仲々忙しい。夜明けと同時に小屋を飛び出す連中は當り前で、七時ともなれば、小屋に残っているのは、病人か怪我人くらいのものである。夕方比較的遅くまで行動している、富山から二日程で劍を往復することも、さほど珍しくなくなつた。

EVEREST

酸素論議

登頂余聞

六月十二日付のタイムズ紙に、H.P.ガウツドという署名の投書が掲載されていた。その内容は今回のエヴェレスト登頂の成功はヒラリーの

の誤りを犯すと考える。スペインのことわざに「良識が働かないと、科学は氣違いになる」というのがある。……私はネパール當局にエヴェレストと周辺の氷河とを氷河学者と山に登らない地質学者と、もちろん、まじめな雪男たちのためのだけの禁獵地にしたらよいと進言したい。もし、そうでない

と、やつとエヴェレストの興奮がおさまつた頃には、何の科学的助力も受けずに、心臓と肺だけにたよつてエヴェレストの頂を極めようという聲が高まらなかつたら、不思議な位である。ナンゼンに曾ていつた。難事は立ちどころに遂行されるが、不可能事はひまがかゝる。」と。

言明によつても酸素の使用が不可欠であつた。この機会に三十年前に、反スポーツ的提案だとして非難されながらも、酸素なしではエヴェレストに登れないと主張したG.I.フィンチ教授に感謝せよという趣旨のものである。フィンチはうまでもなく一九二二年の遠征にエヴェレスト二萬七千三百フィートに達している。現在はインドのプーナの化学研究所にあるが、彼の友人たちから今回の成功に寄與した彼の功績を讃える手紙を出すようにと投書の主は希望していた。

ところが四日後の十六日付には、「エヴェレストと酸素」の題で、テイルマンが同じ紙上に投書している。それは酸素セツトなしではエヴェレストに登れないと断定するのは早すぎるというのである。年々の論議がまだ續いている感じである。「ガウツド中佐がフィンチ教授に感謝せよといわれることには賛成だが十分に確かめた上でないと、酸素セツトの演じた役割を過大に評價することは速断

新名譽會員の横顔

冠松次郎氏

會員番號二二三七、一九〇九年入會。一九二三年幹事となり終戦近く迄役員をつとめられた。一九一〇年七月常念・槍に登山して以来、白峯三馬、組母谷道、奥秩父、夙峯三馬、劔(祖藏谷を始めて降る)、岩井谷から薬師、早月尾根から劔、御山澤よ

り東澤、大日尾根から立山東面の谷、笛吹川源流、黒部下郷下中心の徒渉通過、聖澤より遠山川へと幾多の先蹤者登山を果さされ、以後耳順に近き今日迄絶間なき山岳精進をされ、許多の報文・著書を以て後進に範を垂れていられる本邦代表登山家の一人。今更本會より名譽會員に推薦するのも遅い位である。冠氏の登山業績上の特質は人も知る黒部及びその流域の山々の探行にあることはいふ迄もない。本邦登山史上黒部時代の中心人物であり、夏山・冬山共に溪谷登降の醍醐味を近代的に生かして後進を誘導啓發した功績は、我が登山界の忘れることの出来ないものである。

辻村太郎氏 會員番號二一、一九〇六年入會。理学博士。一九〇七年常念岳登山を「山岳」に通信していられるが、それは單なる登山家としてよりも地理學者としての最初の高山接見であつたかと思われる。果然山崎博士の創見に續いて一九一一年頃日本アルプスと既往の氷河の研究發表となり、以來地學界に重きを示されると共に、屢々本會員その他登山界にも啓蒙的講演・報告・指導をされた。世に山岳及び登山に關係深い自然科學專攻の學者は少くないが、早期會員にして五十年に近く本會員籍を保たれ、山岳への熱情を抱懐する氏の如き科學者は稀に見る所現在教授の地位は退かれたが尚かく鏢として御専門は元より國立公園山岳地などの調査踏査にも挺身していられるのは大慶の至りである。(T.N.)

ヒマラヤ委員會の解散と新しい組織

去る八月下旬中尾・川喜田兩君の歸國を以て本年のマナスルウ隊も一應終了したので、豫ての決定に基きヒマラヤ委員會は解散することとなつた。九月七日最終集會を交詢社にて行い、席上横委員長から経過報告並に委員、事務局員の勢に對して感謝の辭が述べられ、三田隊長から本年のマナスルウ隊の概要の報告があり、經理擔當者から會計の報告があつた。本日の會合を以てヒマラヤ委員會はその任務を終了し、若干の殘務は引續き夫々の擔當者が行うこととなつている。

(出席者)横、松方、日高、三田、早川、堀田の六委員、加藤泰、谷口、望月、對島(毎日) なお明年のマナスルウ登山隊派遣のために會は九月九日の役員總會で廿四名の小委員を決定し、九月十七日の會合で新しいヒマラヤ委員會並に實行委員會等の人選、運営方針等の細目を決定するはこびとなつた。詳細は次号で發表されるであらう。

役員退任の件訂正

前号會報一頁所載「退任された役員」の記事中、評議員の中に西堀榮三郎、伊藤秀五郎とあるのは誤りで、西堀、伊藤兩氏とも本年度も評議員となられてゐるのこゝに訂正して御詫が致します。

★山岳第48年發刊★

承らくお待ちせした一九五三年の「山岳」は左記内容を以て發刊され、本會報と前後して配本の豫定であります。ついでには本年度の會費未納の方は此際至急御納入下さるよう切にお願い致します。

目次

- アンナプルナとマナスルウ……………今 西 錦 司
- 「ツェルマットのクラブ室」を……………成 瀬 岩 雄
- 中心として……………津 田 正 夫
- 冬の知床半島の山々……………新 井 清
- ……………AACK・京大山岳部
- 木曾御岳の夏(赤川谷傳上川)……………山 崎 春 雄
- ……………宮 殿 下……………山 崎 春 雄
- ヘルヴェチア・ヒュッテと秩父……………津 田 正 夫
- セガンチニの跡を訪ねて……………津 田 正 夫
- ……………島 田 巽
- ……………追悼 秩父宮殿下(横・松方)
- ……………ヒマラヤン・ノーツスイス
- ……………Annapura and Manaslu, 1952
- ……………(英文)
- ……………確保論(横組)……………金 坂 一 郎
- ……………A5判本文二〇〇頁 寫眞二七葉
- ……………折込寫眞一葉 地圖挿圖四葉
- ……………折込地圖一葉 定價四〇〇圓(會員頒價三五〇圓)

會務報告

役員會

六月 役員總會(十日) 理事 成瀬・渡邊・沼倉・交野・望月・藤井・金坂、評議員 神谷・沼井・日高・岩永・大澤・村井、監事 石原・林

議事 一・エヴェレスト登頂に對しアルパインクラブ宛祝電の件、二・名譽會員に冠、辻村兩氏推薦の件、三・ヒマラヤ委員會存続の件、四・定款改正に關する件、五・本年度ウエストン祭の件、六・體協傘下團隊史編纂の件、七・贊助會員募集の件、八・學生部報告

七月 月例會計報告

七月 役員總會(八日) 會長 櫻・理事 成瀬・交野・沼倉・渡邊・望月・金坂・今村・杉本・林・評議員 神谷・日高・別宮・沼井・堀田・岩永・谷口・監事 石原

議題 一・當番制復活の件 二・歴代會長寫眞を本會圖書室に掲載の件 三・交通公社主催山中湖キヤンピング指導者派遣の件 四・倉敷紡績會社山岳部講習會に指導者派遣の件 五・松本市に於ける國鐵主催夏山打合せ會の件 六・ウエストン祭報告 七・舊會員の會費徵收方法の件 八・原主事辭任、後任者決定の件 九・第八回國體に關する件 十・本會のヒマラヤ遠征に對し毎日新聞社に於て後援繼續決定に對し受諾の件

八月 役員總會(二十二日) 一・マナスル登山隊員各自分擔任務報告書提出を求める件 二・マナスル

登山報告書編輯に關する件 三・亞國政府よりマナスル登山に關する資料を求められたる件 四・京大山岳部アンナブルナ遠征の件 五・體協關係事務交渉委員專任の件 六・本會創立五十週年記念事業計畫の件 七・マナスル登山募金中間報告の件 八・書記津輕不二雄就任の件 九・妙義山米軍山岳訓練學校設置に關する件 十・月例會計報告

八月 臨時役員總會(二十一日)

會長 櫻・理事 成瀬・交野・渡邊・沼倉・望月・大塚・舟橋・評議員 日高・沼井・岩永・三田・谷口・堀田・監事 石原

議題 一・マナスル登山隊裝備品の處分方法の件 二・妙義山米軍山岳訓練學校設置に關する件 三・ネパール政府より來年度マナスル登山の正式許可通知受領の件 四・マナスウル登山隊中尾・川喜田兩員歸國歡迎會の件 五・ラナ氏歸國の件 六・京大安ナブルナ隊歡送會の件

名譽會員に冠、辻村兩氏

六月の役員總會で冠松次郎、辻村太郎の兩氏を名譽會員に推薦することに決めましたが、兩氏とも御快諾下されたので御知らせします。

會費についてお願い

本年度の會費納入につきお願いいたします

★基本會費 年額六〇〇圓

★ルーム維持費 年額 一五〇圓

(地方會員は六百圓を、東京都、千葉、埼玉、神奈川居住會員は七五〇圓を御納め下さい。尚東京在住會員は支部費五〇圓を加え八〇〇圓となります)

★入會金 五〇〇圓

(本年度から團體登錄會費の取扱いは中止しましたが團體代表者として入會されることは一向差支ありません)

會費は會の活動と發展の源泉であります。最近の會の財政は決して樂觀を許しません會の運営上未納の方は至急御納入下さるよう特にお願ひします。

★第八回国體登山技術役員長決定

役員長決定

第八回国體登山技術役員長には金坂一郎氏を推すことに常任理事會において決定した。

★ルームの常任者決定

原全教氏の後任として津輕不二雄氏が決定、ルームに常任していただきますから、長い間御不便をかけましたが何時でもルームをお訪ね下さるようお願いいたします。

朝日連峯の登路(四頁より續)

「山岳」に於て著者は、義秀は如何なる用意の下に冬の朝日連峰を突破したかと疑問にされているが、これは米軍が飛行場を急造するに鐵板、鐵鋼を敷く如くに、我國にも深雪地域では根曲竹の簀を編んだものを敷き延べるのを繰返して行く方法があつたが、それを大仕掛にやつたのではあるまいか。山小屋を中心に、竹簀、燃料、食糧を豊富に配置して、人

夫は輪鏝で作業する代りに、「草岡文書」の免許狀の如く萬役錢の免除、其の他の特典を平生與えられていたのである。こうした事によつてのみ冬期間も案外多くの人馬の通行が可能となるのである。朝日山道と別て、小國から村上への山道に就ても若干の資料はあるが別の機會に譲りたい。

昭和廿八年九月廿五日發行

東京都千代田區

神田駿河臺四ノ六

發行所 社團 日本山岳會

編集者 渡邊 公平

電話(四五二一) 日本體育協會

神田(四五二一) 日本體育協會

東京都港區赤坂池五番地

印刷所 株式會社 技報堂



登山用品

東京・新宿駅前

かざみ

TEL(35) 2959・2960